第II編　関東における縄文時代中期末の土器群

折原　繁

I　はじめに

関東地方の縄文時代中期に属する加曽利E式土器の細分とその実体の把握については現在さかんに議論が行われている(1)。加曽利E式の中でも終末期の土器については様々な意見が提出され混乱に一層拍車をかけている(2)。この混乱は終末期の土器をどのように型式設定し、どのように実体を把握するかという点に焦点がしぼられている。終末期の土器は現在、E III式、E IV式の名称が混在して使用されているが、この型式名は神奈川県吉井城山貝塚の報告に起源がもとめられるものである。吉井城山貝塚の報告では終末期の土器をE III式土器につづくものとして報告したが、茨城県岩坪貝塚の報告ではこれを新型式であるE IV式として報告した。これ以来加曽利E式土器の終末期はE III式→E IV式という変化によって説明されることになったのである。ところがこの変化の経路については吉田格と岡本勇によるE III式の認定の違い（吉田1956）、岩坪貝塚のE IV式土器を東北地方の大木10式土器とする渡辺誠の批判があり（渡辺1966）混乱した状況となった。この混乱期の研究動向については堀越（堀越1972 a・b・c）に詳しい。堀越は過去の諸説を研究史的に整理し、いわゆるE III・E IV式がE III式として統合できるものであるとした。ところが現実にはこのE III式には2種類のタイプが含まれており、分離することは可能であると思われる。またこれら2種類はさらに細分され、それらが群として存在していたであろうとも考えられるのである（3）。

したがって本論では現行の単系的変化に終止せず複系的変化による土器の認識を行っていきたい。また現在土器を単なる編年のための道具とする考えが流布していることは危惧の念をもって対処せざるをえない。土器が本来容器としての意味を有するのであれば、土器の属性としての時間は存在していた一群の土器のごく一部を解釈したにすぎない。土器の研究は本来各地方・各地域において同時に存在した一群の土器の存在状態と、その時間的変化に注目して人間行動の復原を行わんとするものである。縄文時代の土器研究が編年のための編年に忙殺されている現在、これとは異なった正確な土器個体の認識と、その時間的な変化の在り方とを追求していく必要があろう。またこれらを本にして地方、地域の在り方をも追求する必要があることは云うまでもない。この場合現行の型式にとらわれることなく、新たに土器の観察を開始することから始めることが必要であろう。

II　方法について

加曽利E式終末期の土器について考えていく場合、その方法と限界について述べておく必要があろう。まず現行の縄文時代土器論はメルクマールとなるべき特定のタイプの深鉢形土器の分析に主力を注いできたといっても過言ではないであろう。そこでは同時代性を有した土器のセットや深鉢形土器の中における個体差についてさえもあまり考慮されなかった。このことは縄文式土器内における変差が大きいことと関係していると思われる(4)。本論では同時期に存在した複数の土器を扱っていくためにセットの概念を用いていくことにした。

セットは同一時期に存在した有機的な関係を有する種々の土器個体の集合である。種々の土器個体は相互に機能を補足しあって、全体として容器としての役割りを完結させている。セットは器種としての深鉢形・浅鉢形・壺形・注口土器を基本形とし、この各々が変化の型である器形に分離され、これに一定の文様が付されるという構造を有している。

さて人間が土器を製作し、使用し、廃棄する過程の中で、土器はそれぞれ過程に即した有機的な関係を保って存在する。すなわち製作時におけるセット、使用時におけるセット、廃棄時におけるセットの三者が想定できるわけである。各時点におけるセットは次のような意味を有していたと考えることができよう。

A　製作時におけるセット

焼成時における土器の有機的な在り方である。この在り方はある時代での基本的なセットを構成するものである。もちろんこのセットの中には一度に焼成する土器をまとめるための時間や何度かに分けて焼成する場合の時間が誤差として含まれることはやむをえない。

B　使用時におけるセット

住居内などにおいて使用している時点での土器の在り方である。焼成時における土器のセットがある程度反映されるが、古い土器をすべて一度に廃棄したのではない限り新しい土器と古い土器とが混在して存在する。使用時におけるセットは製作時におけるセットよりも誤差が大きくなり、したがって古い土器をも含んだ形でセットが成立していると考えることができよう。

C　廃棄時におけるセット

特殊な場合を除いてゴミ溜的な土器の在り方をする。ゴミを投入するという行動が開始されてから終了するまでの時間的幅をもった土器が全体として有機的な関係を有する。このセットは使用時におけるセットよりも時間的誤差が大となる。したがって廃棄時におけるセットの中には使用時におけるセットを反映するものばかりが含まれているとはかぎらない。

以上のような3種のセットを理念上では設定することができる。これによればある時代性を如実に反映する土器のセットを入手するためには焼成時におけるセットを得ることが最も近い道であるということになる。ところが通常、調査による遺存状態から得ることができるのは廃棄時におけるセットの場合が最も多い。製作時におけるセットは窯址の発見されていない現在、

望むべくもなく、使用時におけるセットは火災等の類例が少なく資料として扱いにくい。では廃棄時のセットから製作時・使用時のセットを引き出すためにはどのような点に留意すべきであろうか。まず廃棄時における遺物の状態は清掃行為がないかぎりゴミ溜的様相を示すことに注意したい。この状態は住居址等の遺構から出土した遺物はすべてが同時期性を帯びたものではないことを物語っている。このことは次のような遺構の埋没状況を想定することによって理解することができよう。住居址が空屋になった時点で、いままで使用されていた炉埋設土器や埋甕はそのまま残され、住居址は埋没し始める。住居址は鉢状から窪地となりしだいに平担になっていく。この間遺物は継続して捨てられていくが、この中に捨てられる遺物は住居址と同時代性を帯びたものも捨てられるが、同時代性を有しないものも入りこむ余地がある。したがって住居址内の一括遺物は同時代性を有するものとして扱うには疑問が残る。ところが炉埋設土器や埋甕については住居址の使用時に設置されたものであるとみなされるから同時代性を有するものであるとみなすことができよう。もちろん両者の土器が住居址の構築から廃棄に至る過程の中で、完全に同時代性を有するかどうかは疑問の残るところでもある。しかしながら炉埋設土器を現在流布している考え方のように一型式古いものとして扱っていくのであれば、この型式差をも含めて使用時における誤差の中に繰りこめば良いだけのはなしである。このことから炉埋設土器を型式的・時間的に分離し、一段と低い位置へ落としこめることこそ問題とすべき態度であると考える。

以上述べてきたごとく炉埋設土器や埋甕は使用時の土器セットを組み立てていく素材として有効なものであると考えられる。ここでは両者を基本資料とし、これに床面上から出土した完形土器、あるいは大型破片を十分吟味しながら加えてセットを組んでいくことにした。このようにして得られる1軒ごとの土器のセットはそれだけで同時期の土器セットのすべてを満足させるものではない。したがって同時期の土器セットのすべてを満足させるためには一軒ごとのセットを再度合成してやる必要が生じる(5)。このようにして得られた土器のセットは集落全体の使用時の土器のセットという意味を有している。後述するように本論では集落全体のセットをさらに地域的に合成していく方法をとるので、複数の集落を重ねた使用時の土器のセットという意味を有してくる。したがって本論で扱っていく土器のセットは地域的な広がりを有する同時期の使用時の土器のセットであってそれ以外のものではない。

この方法を用いる場合、製作時のセットをも復原することは不可能である。使用時のセットは製作時のセットの影響をかなり受けると考えられるが、使用時のセットに含まれる時間的な誤差を消去する方法が確立していない現在、製作時のセットについて云々することはいたずらに混乱をまねくこととなる。このようにして得られたセットと型式学的方法によって構成されたセットとは不整合を示すことがある。純粋に土器の観察のみから得られたセットは本論で述べた製作時のセットと類似するものになると思われる。しかしながらこのセットは一定時において流布した技法が時間的な変化過程で完全に消滅することを前提としているため、理念上で

のセットとしての制約をのがれられない。このことは製作者の理念上の問題まで逆のぼらなければ解決できないものである。したがって本論で述べた製作時のセットとも異なったセットとして考えざるをえない。またこの型式学的方法によるセットでは土器の微細な変化をも追求できる利点を有しているが、その差が具体的には何に起因し、製作時、使用時においてどのような関係を有していたのかについては明らかになしえない。しかしながら共存関係からセットを復原する方法もかならずしも無欠のものではない。土器変化の微細な差は消去されてしまうとともに時間的なセットの変化の幅は粗くなる傾向を有している。このような欠点を有してはいるが、使用時における土器のセットの実体やその地域的変化、あるいは土器の系譜関係を追求するためには有効な方法であると考えられる。

III　僧御堂I式・II式土器の提唱

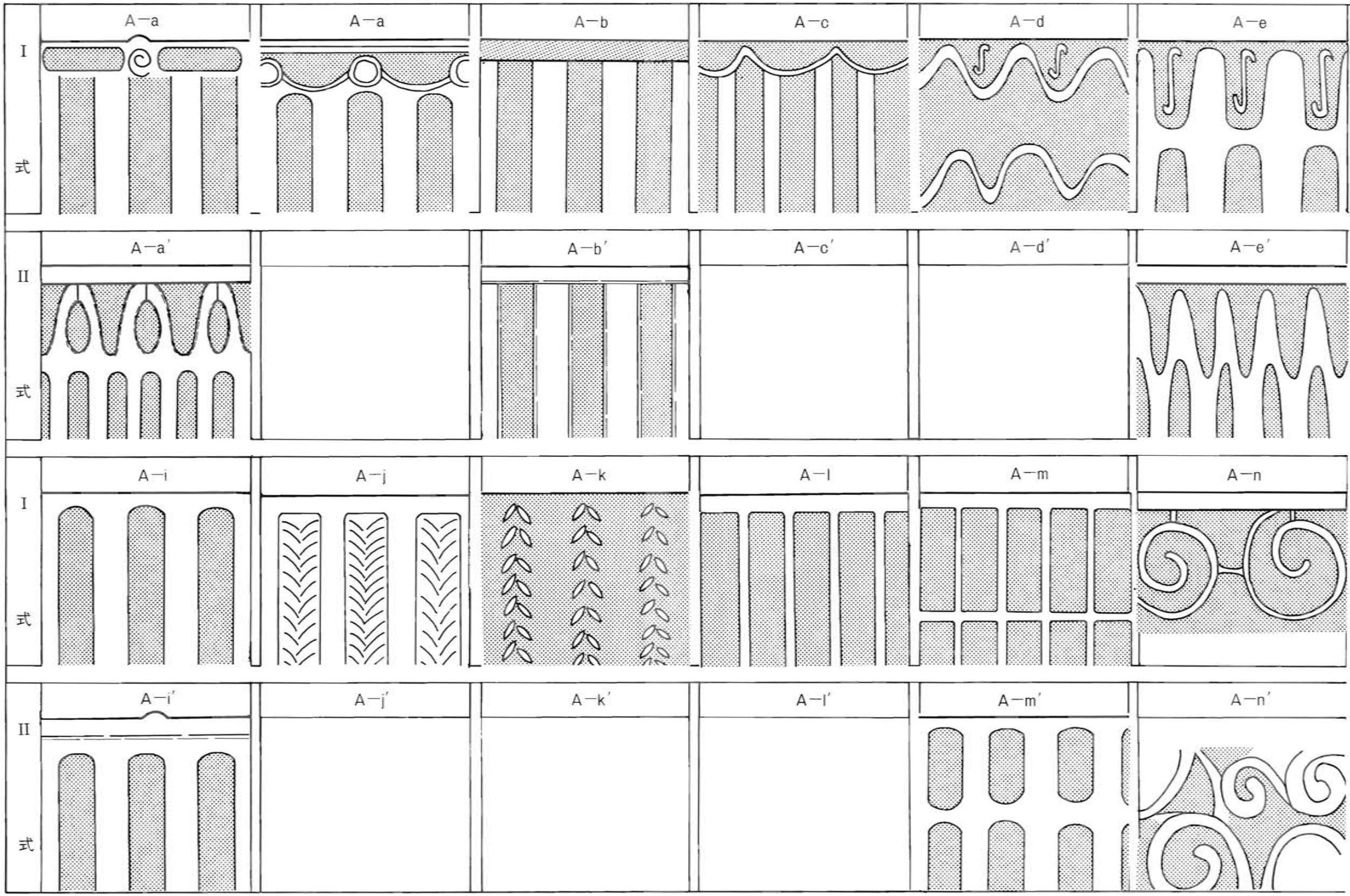
現在までに関東地方の各地から報告された加曽利E式終末期の土器には第1図で示したような文様が施文されている。文様の在り方とその特徴を述べていこう。まずこれらの土器は地文のほかに沈線・隆帯・微隆起帯(6)による文様の加えられたA、地文のみのB、無文のCの3種に大別することが可能である。またこれら3種の土器は各々個別の特徴をもった複数の文様類型から成り立っていることがわかる。これらの文様類型をabcで表わしていくことにする。

A－a　加曽利E式土器の典型である。口縁部文様には渦文状・楕円状の文様が隆帯によって表現されている。胴部文様には懸垂文が配されている。器形はキャリパー状となるが、口縁部の内傾は弱くなる。口唇上には突起様の膨らみが付されることが多い。また胴部の懸垂文にはS字状・蕨手状の沈線が加えられることもある。地文には縄文が使用される。

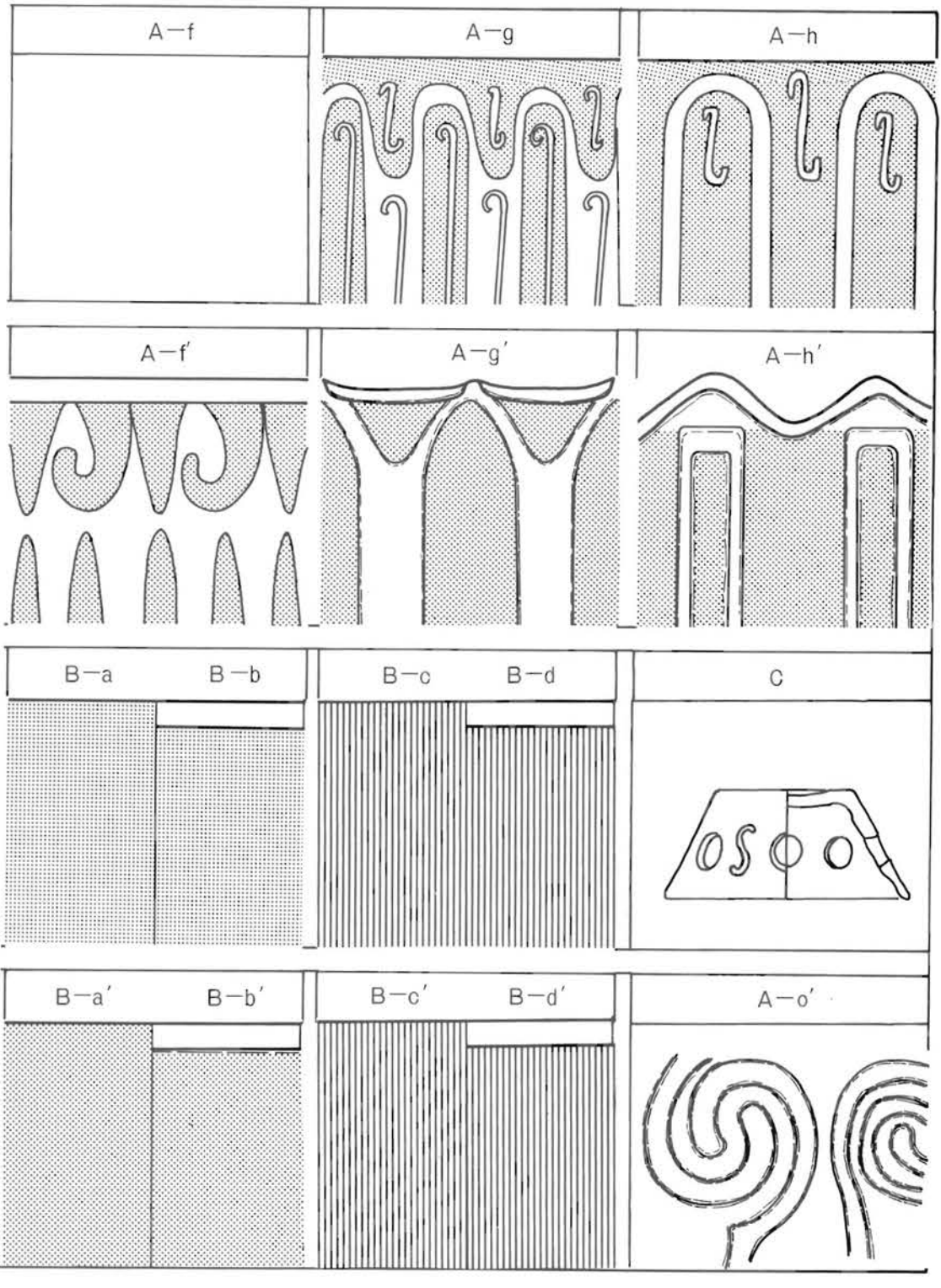
A－b　全体としてT字状の文様構成をとる。口縁部文様は帯状となり、沈線によって区画される。縄文が内部に施文される場合と、無文となる場合とがある。胴部文様には沈線によって区画された懸垂文が配されている。区画内には縄文が施文される。器形は口縁部がほとんど内傾しない頸部の強く、くびれる形をとる。口縁部文様に縄文が施文される場合には口縁部に横位、胴部に縦位の方向に施文され羽状の縄文となる。

A－c　口縁文様は孤線状となり、沈線や、隆帯によって区画される。区画内には縄文が施文される。胴部文様には懸垂文が配される。懸垂文は沈線で区画され、縄文が施文される。器形は口縁部が弱く内傾し、頸部が直線状となる形をとる。胴部の懸垂文は直線的になる場合と、逆U字状になる場合とがある。このほか胴部には蕨手状の沈線文が加えられることがある。また口縁部文様は孤線の上端が閉じたカマボコ状になることがある。

A－d　波状の無文帯を口縁部と胴部に配した土器である。無文帯は沈線によって区画されている。全面に縄文が施文される。器形は頸部の強くくびれる形となる。口縁部にS字状の沈線文が加えられることもある。この類型の土器は波状の無文帯の位置から考えるといわゆる連



第１図　土器文様類型模式図　（上段はＩ式・下段はII式）


A−f
A−g
A−h
A−f′
A−g′
A−h′
B−a
B−b
B−c
B−d
C
B−a′
B−b′
B−c′
B−d′
A−o′

孤文土器との関係を強く感じさせる。

A－e　口縁部文様はU字状の文様が連続した形をとる。文様は沈線によって区画され、内部に縄文が施文される。胴部文様は逆U字状となる。沈線によって区画され、内部に縄文が施文される。器形は口縁部が強く内傾し、頸部がくびれる形となる。口縁部文様にはS字状沈線が加えられることがある。またこの類型の特徴として口縁部無文帯がほとんど区画されぬこと、口縁・胴部の文様が曲線的であることが指適できる。

A－g　口縁部文様はU字状の文様が連続した形をとる。文様は沈線によって区画され、内部に縄文が施文される。胴部文様は逆U字状となり沈線で区画される。区画内に縄文が施文される。胴部文様は口縁部文様の谷部に入りこんだ状態となり、口唇部直下まで接近する。器形は口縁部が弱く内傾し、頸部がくびれる深鉢形を基本とするが、口縁部が直線状の無文帯となる水差状の器形をとることもある(7)。S字状、蕨手状の沈線が付される。

A－h　口縁部から胴部にかけて逆U字状の沈線あるいは無文帯が配された土器である。無文帯をとる場合には沈線によって区画が行われる。無文帯の内外には縄文が施文される。器形は口縁部が弱く内傾し、頸部がくびれる形をとるものらしい。口縁は平縁、波状の両者がある。口縁部にS字状、蕨手状の沈線が加えられる。

A－i　口縁部から胴部にかけて逆U字状の文様が沈線文によって区画された土器である。区画内には普通縄文が施文されるが、直線状の条線文が施文される場合もある。逆U字状の文様の頭部は丸く、文様間の間隔も広い。器形は口縁部が弱く内傾し、頸部の弱くくびれる形をとる。

A－j　口縁部から胴部にかけて逆U字状の文様が沈線文によって区画された土器である。区画内には沈線文による矢羽状の文様が加えられる。器形は口縁部が弱く内傾する形をとるものらしい。口縁部は平縁となる。

A－k　縄文を地文とし、これに沈線による矢羽状の文様を加えた土器である。口縁部には沈線文が引かれ無文帯を区画している。器形は頸部が弱くくびれ、胴部が突出した形をとる。口縁部は波状口縁となる。

A－l　口縁部から胴部にかけて逆U字状の文様が沈線によって区画された土器である。文様の区画内には縄文が施文される。まれに区画の内外に刺突文が加えられることがある。口縁部上方には沈線文や隆帯によって無文帯が区画されている。器形は口縁部が直線状となり、頸部のくびれがほとんど無い形となる。文様は頭部が平担となり接近して施文されるという特徴を有する。

A－m　口縁部には隆帯によって区画した長方形の文様を胴部にも隆帯による長方形の文様を配した土器である。各文様は互いに接して方眼状になっている。文様の区画内には縄文が施文されている。器形は口縁部が強く内傾し、頸部がくびれるキャリパー形になるものと思われる。

A－n　隆帯を貼りつけた渦文状の文様を主文様とする土器である。渦文状の文様は横位や縦位に、連続されて複雑な文様構成となる。地文には縄文が施文される。器形は口縁部が強く内傾し、頸部のくびれが上方にあるキャリパー形類似の形となる。

B－a　全面に縄文の施文された土器である。深鉢形、浅鉢型の両器種に使用される。深鉢形土器の場合器形は口縁部が弱く内傾し、頸部が強くくびれる形をとる。B－a′類型との識別は困難である。

B－b　口縁部に無文帯が区画され以下縄文が施文される土器である。無文帯は沈線によって区画される。器形はやや内湾しながら開口する浅鉢形土器の形をとるのが一般的である。またこの類とB－d類とが共用されて施文される土器もまれにある。

B－c　全面に直線的な条線文が施文された土器である。器形は口縁部が内傾し、頸部のくびれる形をとるのが普通であるが、中野僧御堂遺跡出土土器の如く、直線状に開口する口縁部に小型の胴部が接合された深針形となる場合もある。

B－d　口縁部に無文帯が区画され、以下直線的な条線が施文された土器である。無文帯の区画は沈線によって行われる。器形は口縁部が内湾する浅鉢となるのが普通であるが、口縁部が弱く内傾し、頸部のくびれの弱い深鉢形土器の形をとる場合もある。この類の土器はB－d′類型と識別することは困難である。

C　無文土器である。無文であるためc′類型との識別はつけにくい。特殊な様相を示す土器についてのみ存在が確かめられる。第1図の器台形土器は本類型に含まれるものである。断面が台形状となる器台で、透し孔7ヶ所を有する。透し孔間にはS字状の沈線文が加えられている。

次にもう一群の土器についてその特徴を述べて行こう。これらの土器に対しては各類型の肩部に′を付して前者の土器と区別している。

A－a′　口縁部文様に連続U字状と楕円状の文様を微隆起帯や沈線によって区画する。楕円状の文様はU字状の文様の谷部にはまりこんだ状態に配置されている。文様区画内には縄文が施文されている。胴部には逆U字状の文様が微隆起帯や沈線によって区画され、内部に縄文が施文される。口縁部上方には無文帯が微隆起帯や沈線によって区画されている。器形は口縁部が強く内傾し、頸部の強くくびれる形をとる。口縁は平縁あるいは波状の両者の例がある。また口縁部に橋状把手が付される場合がある。文様の区画は沈線、微隆起帯のいずれかが単独で使用される場合と両者が共に使用される場合とがある。後者では口縁部無文帯の区画に微隆起帯が使用され、口縁部文様や胴部文様には沈線が使用される。またS字状の沈線文は加えられない。

A－b′　T字状の文様構成をとる土器である。口縁部文様は帯状となり微隆起帯で区画される。区画内は無文となり縄文は施文されない。胴部には直線状の懸垂文が区画される。区画は微隆起帯によって行われ、内部に縄文が施文される。器形は口縁部が内傾し、口縁部から底部

にかけて直線状にすぼまる形をとる。

A－c′　現在までのところ報告例が無い。

A－d′　現在までのところ報告例が無い。

A－e′　口縁部文様はU字状の文様を連続させた形をとる。文様は沈線によって区画され、内部に縄文が旋文される。胴部文様は逆U字状となり、沈線によって区画される。内部には縄文が施文される。口縁部には無文帯が沈線によって区画される。器形は口縁部が湾曲し、頸部のくびれる形をとる。この類型の文様はA－e類型の文様に比してより直線的となり、胴部文様に至っては柳葉状となる。また胴部文様の上端は口縁部文様の谷部にわずかに入り組んだ状態となるのが一般的である。この類型の文様は普通沈線によって表現されるが、まれに微隆起帯によって表現される場合もある。

A－f′　口縁部文様はU字状と渦文状の文様とを組み合せた形をとる。文様は沈線あるいは微隆起帯によって区画され、内部に縄文が施文される。胴部には逆U字状の文様が区画されるらしい。内部には縄文が施文されるものと思われる。口縁部上方には微隆起帯や沈線によって無文帯が区画される。器形は口縁部が内傾し、頸部のくびれる深鉢形土器となる場合もあるが、橋状把手を付した壺形土器となる場合もある。文様は微隆起帯や沈線によって表現されるが両者が共用されることもある。その場合には口縁部無文帯の区画は微隆起帯が、口縁部・胴部文様には沈線が使用される。

A－g′　口縁部文様は連続U字状となり微隆起帯や沈線によって区画される。区画内には縄文が施文される。胴部文様は逆U字状となり微隆起帯や沈線によって区画される。区画内には縄文が施文される。胴部文様は口縁部文様の谷部に入りこみ上端は口縁部無文帯直下まで達する。口縁部無文帯は微隆起帯によって区画される。無文帯は波状口縁の場合には波頂部で一度途切れ再度開始される。器形は口縁部が弱く内傾し、頸部のくびれが弱い深鉢形となる。この類型の文様はA－g類型の文様に比してより直線的となる。

A－h′　口縁部から胴部にかけて逆U字状の文様が区画された土器である。文様は微隆起帯によって区画され、区画の内外に縄文が施文される。口縁部には微隆起帯によって無文帯が区画されている。器形は口縁部が内湾し、頸部のくびれる波状口縁の深鉢形土器となる。

A－i′　口縁部から胴部にかけて逆U字状の文様が区画される。区画は沈線で行われ、内部に縄文が施文される。逆U字状の文様の頭部は丸く、文様間の間隔は広い。口縁部には微隆起帯によって無文帯が区画されている。器形は口縁部が内湾し、頸部が弱くくびれる深鉢形となる。口唇上には突起が付される。

A－j′　現在までに出土例無し。

A－k′　現在までに出土例無し。

A－l′　現在までに出土例無し。

A－m′　口縁部から胴部にかけて隅丸方形状の文様を2段に配置した土器である。口縁部に

は沈線による小型の隅丸方形の区画を行い、内部に縄文を施文している。胴部には大型の同種の文様を配置している。文様の内部には縄文を施文している。器形は口縁部上端が外反し、口縁部下部から底部にかけて湾曲する深鉢形となる。

A－n′　渦文状の文様を組み合せて配置した土器である。胴部および頸部にかけて微隆起帯による文様を配し、地文に縄文を使用している。口縁部の上方と胴下半部を欠いているため器形の全貌は不明であるが、頸部が強くくびれ胴部の張る形をとるものと思われる。

A－o′　複合渦文状の文様を有する土器である。文様は微隆起帯によって表現されている。地文は無く無文となる。この類の土器は口縁部に無文帯を有する壺形土器となる。橋状把手が付されることが多い。またこの土器は表面のミガキも良好で、丹を塗布されることも多い。

B－a′　全面に縄文の施文される土器である。器形は深鉢形をとることが多いらしい。B－a類型との識別は困難である。

B－b′　口縁部に無文帯が区画され、以下縄文が施文された土器である。無文帯は微隆起帯によって区画される。器形は口縁部が内傾し、頸部のくびれた深鉢型土器の形をとる。口縁部には橋状把手が付されることがある。

B－c′　B－c類型との識別が困難なため、この類型の土器の報告例は得られない。

B－d′　口縁部に無文帯が区画され、以下条線文が施文された土器である。口縁部無文帯は沈線で区画され、条線文は波状となることが多い。器形は口縁部が直線状となり頸部が深くくびれる深鉢形や、壺形土器となる。

以上述べてきた各類型の土器についてその分布状態をみていこう。第1表のごとくA－aおよびa′類型は神奈川・東京・埼玉・千葉の各県内において両者の存在が確かめられている。A－eおよびe′類型は神奈川・東京・埼玉・群馬・千葉の各県内に於いて両者の存在が確かめられている。同じくA－gおよびg′類型は神奈川・東京・埼玉の各県で両者の存在が確かめられている。またB類のなかでも識別しやすいB－bおよびb′類型の土器は神奈川・東京・埼玉・千葉・茨城の各県内で両者の存在が確かめられている。これらのことからA－aとa′、A－eとe′、A－gとg′、B－bとb′の各類型の土器は同一の文様構成を有しながらも異なった表現方法をとる2者が同一地域内に存在していたことが知れるのである。このことはこれら両者の関係が時間差あるいは個体差として処理されるべき可能性を有してくる。次にこれら各類型の共存関係をみていってみよう。第2表の三角印は共存関係を表したものであるが神奈川県仲町遺跡敷石住居址ではA－e′・A－g′・B－a′の存在が確かめられている。同県大野遺跡ではA－f′・A－o′・B－b′の存在が確かめられている。東京都船田遺跡B地区15号住居址ではA－e′とA－f′との存在が確かめられている。埼玉県宮地遺跡2号住居址ではA－a・A－g・A－iの存在が確かめられている。同県黒谷田端前遺跡5号住居址ではA－g′とB－b′との存在が確かめられている。このように東京湾西側の地域においてはA－a・g・iという一群とA－e′・f′・g′・o′、B－a′・b′という一群が混入せずに存在していたことが知れるのである。

第Ⅰ表　県別土器類型出土表（○はⅠ式、●はⅡ式を表わす。）

県名			神奈川		東京		埼玉		群馬		栃木		千葉		茨城	
遺跡名																
遺構名																
文様Ⅰ式	Ⅱ式		Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式
A－a	－a′		○	●	○	●	○	●	○			●	○	●		●
A－b	－b′		○		○			●			○		○			
A－c	－c′		○		○		○						○			
A－d	－d′				○		○？						○			
A－e	－e′		○	●	○	●	○？	●	○	●		●	○	●		
A－f	－f′			●		●		●						●		
A－g	－g′		○	●	○	●	○	●		●		●		●		●
A－h	－h′		○										○	●		
A－i	－i′		○		○		○						○	●		
A－j	－j′		○													
A－k	－k′												○			
A－l	－l′				○								○			
A－m	－m′												○			●
A－n	－n′												○	●		
A－o	－o′			●										●		●
B－a	－a′		○	●	○		○？						○	●		●？
B－b	－b′		○	●	○	●	○？	●				●	○	●		●
B－c	－c′		○？	●？	○									●	○	
B－d	－d′		○				○？						○			
C													○	●		

また千葉県中野僧御堂遺跡２号住居址ではA－a・B－aが共存し、６号住居址ではA－a・A－bが共存し、８号住居址ではA－a′とA－e′との共存が確かめられれいる。同県貝之花貝塚21号住居址ではA－aとA－bとの共存が確かめられている。茨城県おんだし遺跡１号住居址ではA－a′・m′、B－b′との共存が確かめれている。以上のごとく東京湾東側の地域においてもA－a・b、B－aという一群とA－a′・e′・m′、B－b′という一群が存在し、しかも両者は互いに混入しないという状態にあったことが確かめられた。このような両群の土器が互いに混らない状態は東京湾の西側、東側においても同じように認められる。このことは両群の土器を個体差として解釈するよりは時間差として解釈するほうがより妥当性を有する。特に東京湾西側の地方においてg・g′という同一の文様構成を有する土器が互いに共存しないという事実や、東京湾東側の地域においてa・a′が同様に共存しないという事実はこれら両群の関係が時間差であるという可能性を増すものであると考える。

第2表　遺跡別土器類型出土表(I)（○は出土を▲は共存を表わす）

県名		神奈川県										東京都				東京都																東京都		埼玉											
遺跡名		吉井城山		雑色		仲町		大野		釜利谷		中山谷		御殿山		大倉		船田				貫井南		平尾No.2		平尾No.3		平尾No.4		平尾No.9		宮地		後山		椚谷							
遺構名						敷石住居												B地区15号		B地区16号		住居址外										2号住		敷石		単独出土		22G1号		21G2号		6G1号	
文様	I式	I式	II式	I式	II式	I式	II式	I式	II式	I式	II式	I式	II式	I式	II式	I式	II式	I式	II式	I式	II式	I式	II式	I式	II式	I式	II式	I式	II式	I式	II式	I式	II式	I式	II式	I式	II式	I式	II式	I式	II式	I式	II式
A－a	－a′	○	○	○							○		○									○										▲											○?
A－b	－b′	○												○								○		○											○								
A－c	－c′	○												○																													
A－d	－d′																											○															
A－e	－e′	○					▲								○			▲						○		○?														○?			
A－f	－f′								▲									▲		○?																							
A－g	－g′	○					▲										○											○				▲			○	○							
A－h	－h′	○																																									
A－i	－i′	○														○														○		▲											
A－j	－j′	○																																									
A－k	－k′																																										
A－l	－l′																							○		○		○		○													
A－m	－m′																																										
A－n	－n′																																										
A－o	－o′		○						▲																																		
A－a	－a′	○					▲																					○															
A－b	－b′	○	○						▲															○			○	○		○								○?					
B－c	－c′	○?					▲?																	○																			
B－d	－d′	○																																		○?							
C																																											

類型に入らぬ文様あり　　条線と縄文を伴用　　類型に入らぬ文様あり　　A－g′の可能性もある

第２表　遺跡別土器類型出土表(2)

県名		埼玉														埼玉				群馬										栃木											
遺跡名		坂東山								岩の上		黒谷田端前				膳棚		内畑		小室		三原田						八幡原		槻木沢		羽場		泉		上長井D		古館		真子		弁天池	
遺構名		A１号住		中期17号		B１号敷石		２号敷石		18号住		５号住		単独出土		ATIP						２－R１		１－57		６－27																	
文様Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅰ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式
A－a	－a′																○					○												○?								
A－b	－b′																		○?																						○	
A－c	－c′	○																																								
A－d	－d′			○?																																						
A－e	－e′						○								○						○?						○	○									○		○				
A－f	－f′						○																																			
A－g	－g′												▲											○												○						
A－h	－h′																																									
A－i	－i′									○																																
A－j	－j′																																									
A－k	－k′																																									
A－l	－l′																																									
A－m	－m′																																									
A－n	－n′																																									
A－o	－o′									○?																																
B－a	－a′								○				▲		○																○		○				○				○		
B－b	－b′																																									
B－c	－c′																																									
B－d	－d′																																									
C																																										

縄文と条線と併用

地文なし

第2表　遺跡別土器類型出土表(3)

県名		千　葉														千　葉														千　葉												茨城		茨　域					
遺跡名		中野僧御堂														中野僧御堂				千代田		加曽利		金楠台				すすき山		生谷境堀						貝之花		高根木戸		東台		岩坪		おんだし					
遺構名		1号住		2号住		3号住		6号住		8号住		11号住		6号土拡		16号土拡		遺構外		Ⅳ区				2号住		遺構外				1号住		8号住		9号住		21号住				30号住				1号住		2号住		9号土拡	
文様Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式	Ⅰ式	Ⅱ式
A－a	－a'			▲				▲			▲																				○?	○				▲									▲				
A－b	－b'							▲														○														▲													
A－c	－c'					○																																											
A－d	－d'																	○																○?															
A－e	－e'	○?									▲	○?																						○	○														
A－f	－f'																										○				○																		
A－g	－g'		○														○		○		○		○						○														○				○		○
A－h	－h'	○?																			○																												
A－i	－i'							▲																										○?				○			○?								
A－j	－j'																																																
A－k	－k'																	○																															
A－l	－l'																																					○											
A－m	－m'	○		○																														○											▲				
A－n	－n'		○			○						○																						○															
A－o	－o'		○																																○								○				○		
B－a	－a'	○		▲																	○		○																				○?						
B－b	－b'																	○	○		○?				○									○									○		▲	○			
B－c	－c'														○																																		
B－d	－d'																	○?																															
C		○						▲										○	○																														

↑ 条線と縄文を併用

両群が時間差であるという観点に立って共存関係の確かめられた土器とそれに形態上から同時代性を有すると考えられる土器をも加えて系譜関係をみていってみよう。

A－aからA－a′の変化は神奈川県横浜市雑色遺跡(8)の土器第2図4を中間にはさむことによって理解できる。A－a類型の口縁部に付される渦文状の文様は円形に変化し無文化する。口縁部の楕円状の文様は連続U字状に変化し、その谷部に先に述べた円文を組みこんだ状態となる。胴部の懸垂文は上端が丸くなり逆U字状となる。そしてこれの口縁部に無文帯が加えられ、文様区画が微隆起帯で表現されるとA－a′に変化する。

A－bからb′への変化は文様区画が沈線から微隆帯に変化するほかほとんど変化を受けない。ただA－bの段階において口縁部文様に縄文が施文されたものと無文のものとが存在することを付け加えておく必要があろう。このなかでも縄文の施文されたものは古い段階に属すると考えられ口縁部文様は無文化への方向をたどるものと考えられる。

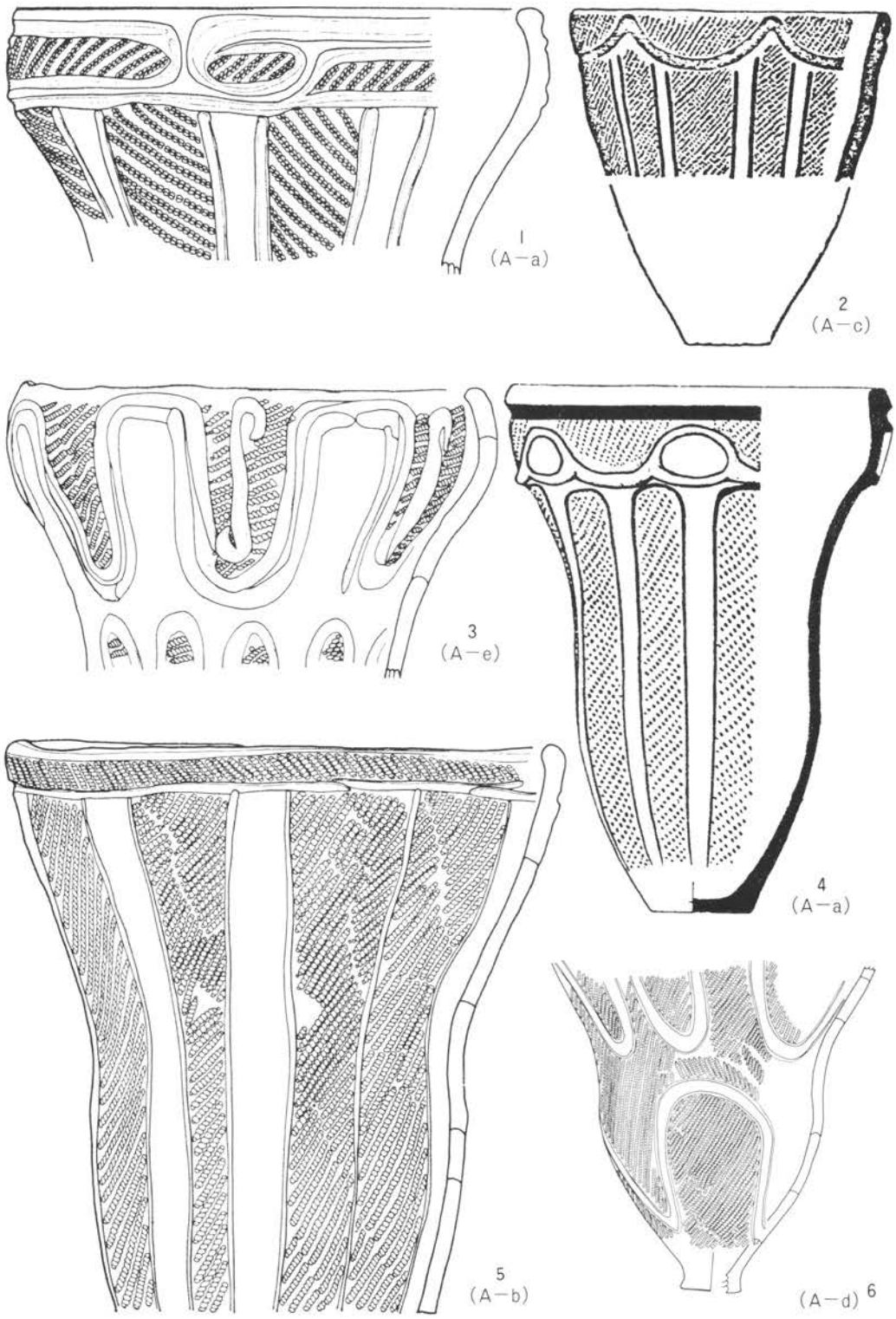
A－cおよびdは現在までの所これに続く土器が発見されていない。あるいはこれら2類型の文様はこれ以後途絶えてしまったと考えることもできよう。この中でもA－d類型はいわゆる連孤文(9)の系譜を引く土器であるが、この土器は同時代中にA－e成立させたと考えることもできよう。A－dとeの間には波状の区画を口縁部と胴部に区画するなど共通する要素が少なくない。

A－eからe′への変化は他の類系の土器と異なり、特異な地域を除き、沈線から微隆帯へという変化の方向をたどらない。文様はe・e′とも沈線で区画される。e′では口縁部に無文帯が区画される点、口縁部・胴部の文様が硬化して直線的になる点がeと異なる。またS字状の沈線文はeにのみ加えられ、e′には加えられない。

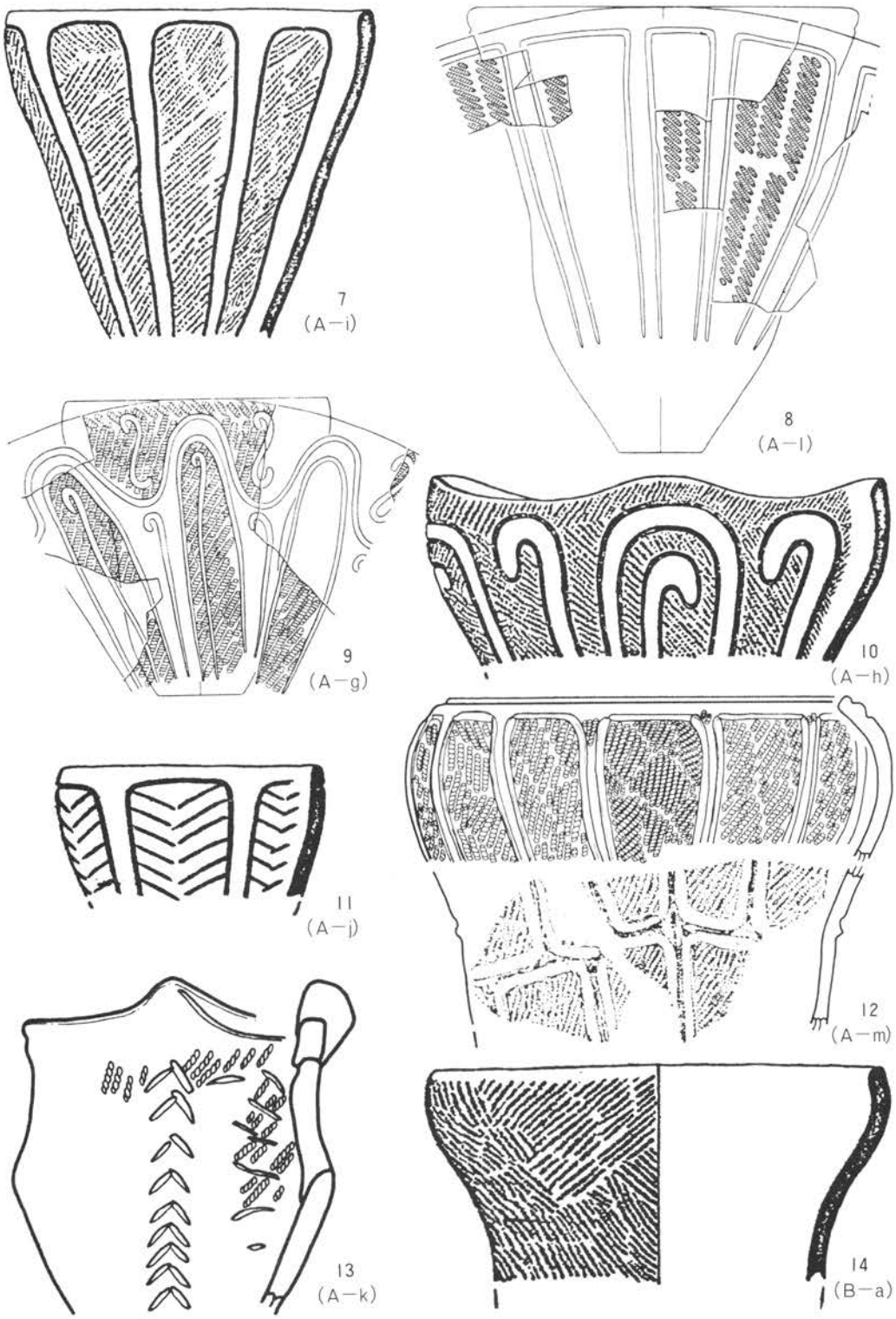
A－f′は先行する類型はなく、A－e′が同一時間内に変化して成立したと考えられる類型の土器である。A－e′が先行するA－nや同時期に存在するA－n′・o′の影響を受けて変化したものと考えられる。

A－gからg′への変化は次のようになる。口縁部文様は切りこみが深くなり、波状口縁の形態をとる場合には波頂部で切断されてしまう。胴部文様は硬化して直線状となりその幅も広くなる。口縁部の上方には無文帯が区画され、波頂部で切断された形をとる。A－gでは文様区画は沈線を使用するが、A－g′では微隆起帯を使用するようになる。微隆起帯は文様区画のすべてに使用されることもあるが、口縁部無文帯の区画にのみ使用されることが一般的である。また量的には少ないが文様区画のすべてに沈線が使用される場合もある。A－gで加えられるS字状・蕨手状の沈線はg′では使用されない。

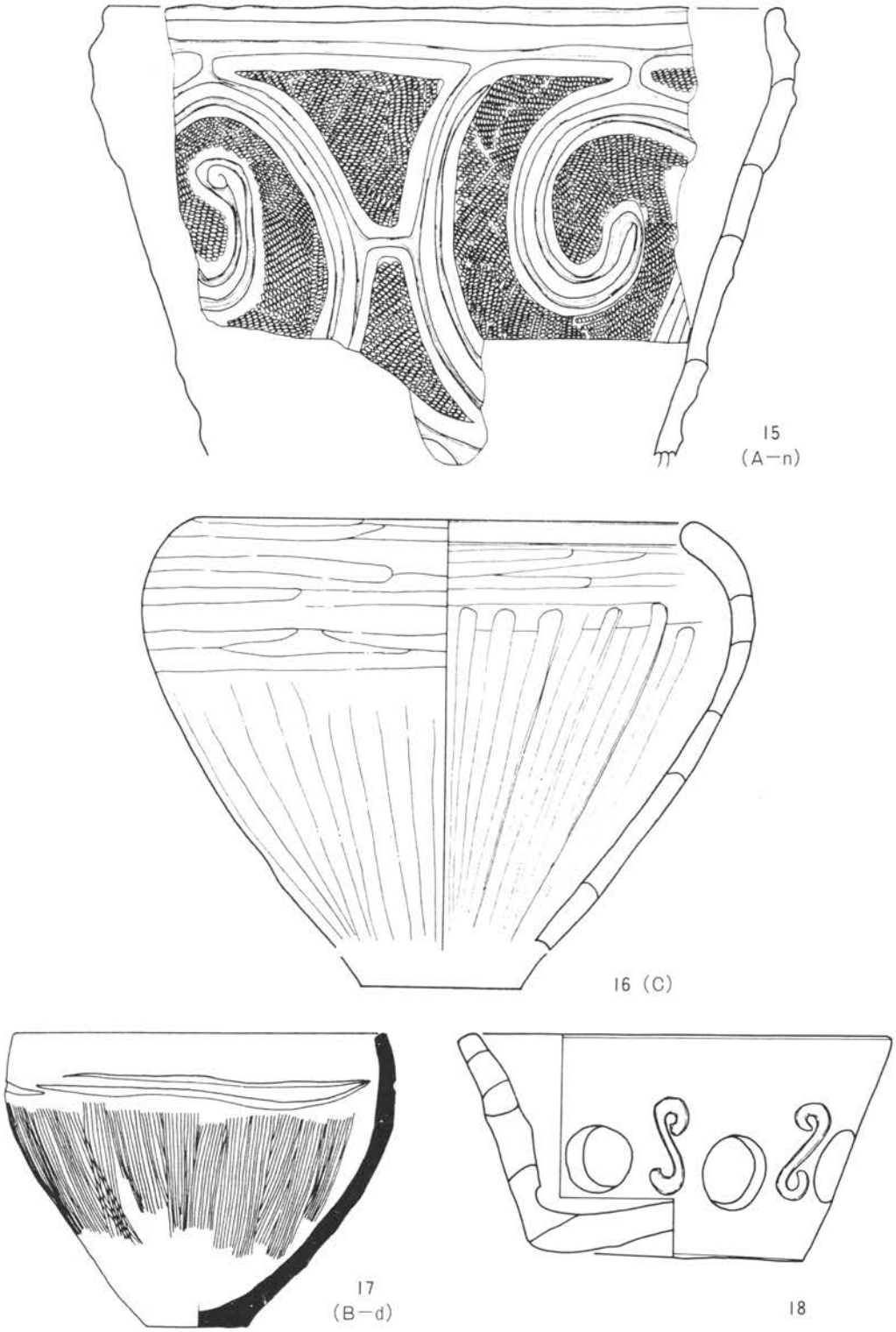
A－hからh′への変化はあまり顕著ではない。口縁部は平縁から波状へと変化し、口縁部上方に無文帯が微隆起帯を使用して区画されるようになる。口縁部から胴部にかけて配置される逆U字状の文様はh′においては微隆起帯で区画されるようになる。S字状の沈線はh′においては加えられない。



第２図　各遺跡のＩ式土器　（縮尺不統一）
僧御堂遺跡（１・３・５・６）　吉井貝塚（２）　雑色遺跡（４）



第３図　各遺跡のＩ式土器　（縮尺不統一）
僧御堂遺跡（12・13）　吉井貝塚（７・10・11・14）　平尾遺跡（８・９）



第4図　各遺跡のⅠ式土器　（縮尺不統一）
僧御堂遺跡（15・16・18）　後山遺跡（17）

A－ｉからｉ′への変化は口縁部上方に無文帯が区画されるのみである。無文帯は微隆起帯によって区画される。逆U字状の文様はｉｉ′とも沈線で区画される。

A－ｊ・ｋおよびｌに継続する文様類型をもった土器は現在までに発見されていない。これら３類型の土器はこの段階でその生命を絶ち消滅してしまったと考えることもできよう。

A－ｍからｍ′への変化は次の如くなる。ｍにおいて盛行した隆帯の使用は途絶へｍ′においては文様区画に沈線が使用されるようになる。ｍにおいてはしっかりした方形の区画が互いに接近して配置されていたのに対し、ｍ′では形が楕円状に変化し互いに間隔を保って配置されるようになる。

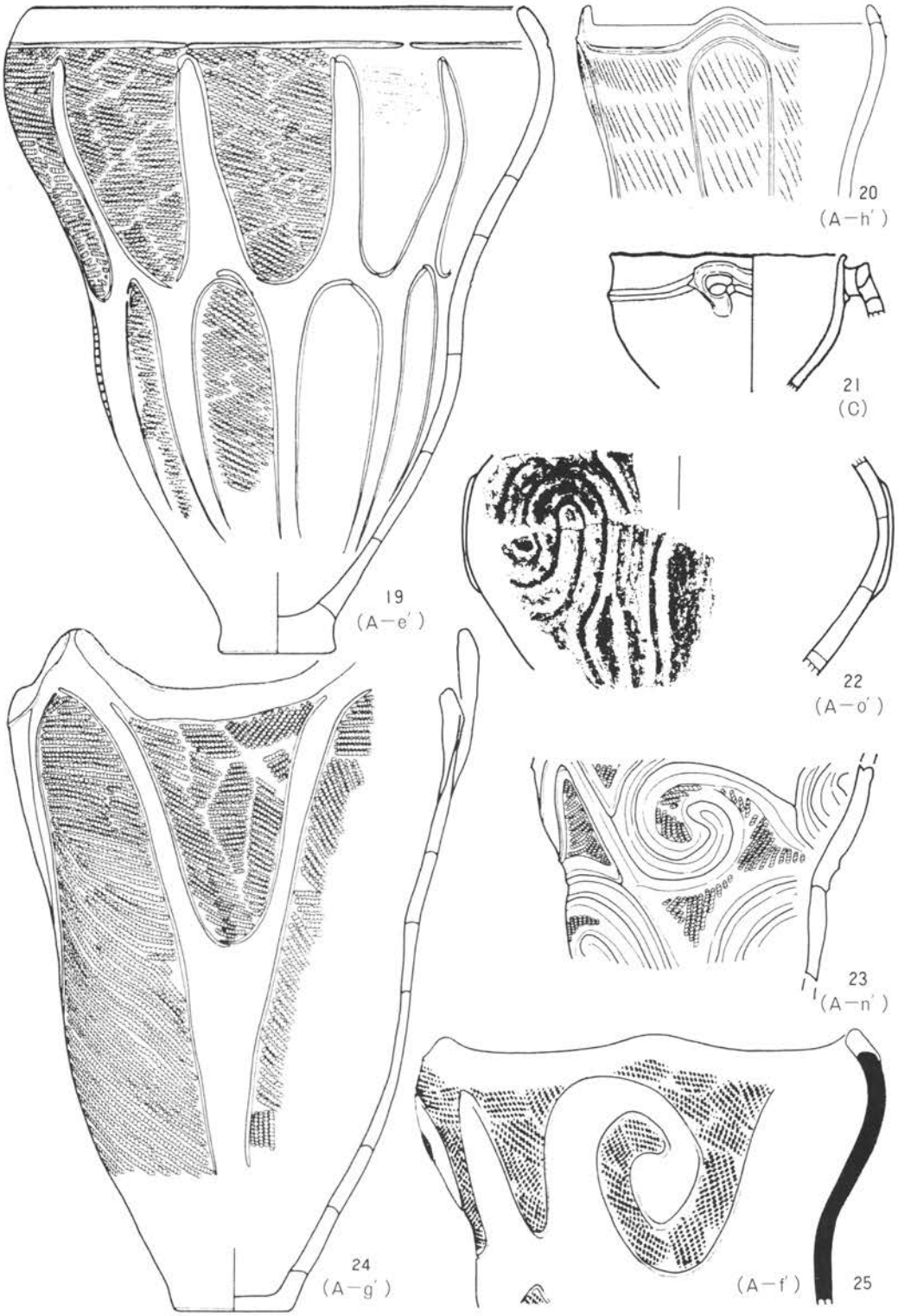
A－ｎからｎ′への変化は微隆起帯の使用によって特徴づけられる。A－ｎ′においては渦文状の文様はより複雑に組み合わされ、縄文を施文した部分と無文部との配置の仕方も無秩序となる。

A－ｏ′の渦文状の文様は微隆起帯で表現される。器形は壺形の土器に限られるようである。先行する類型の土器は現在の所発見されていない。先行するA－ｎや同時期に存在するA－ｎ′の影響を受けつつ無文化の道をたどり、独自に変化・成立を行ったものと思われる。

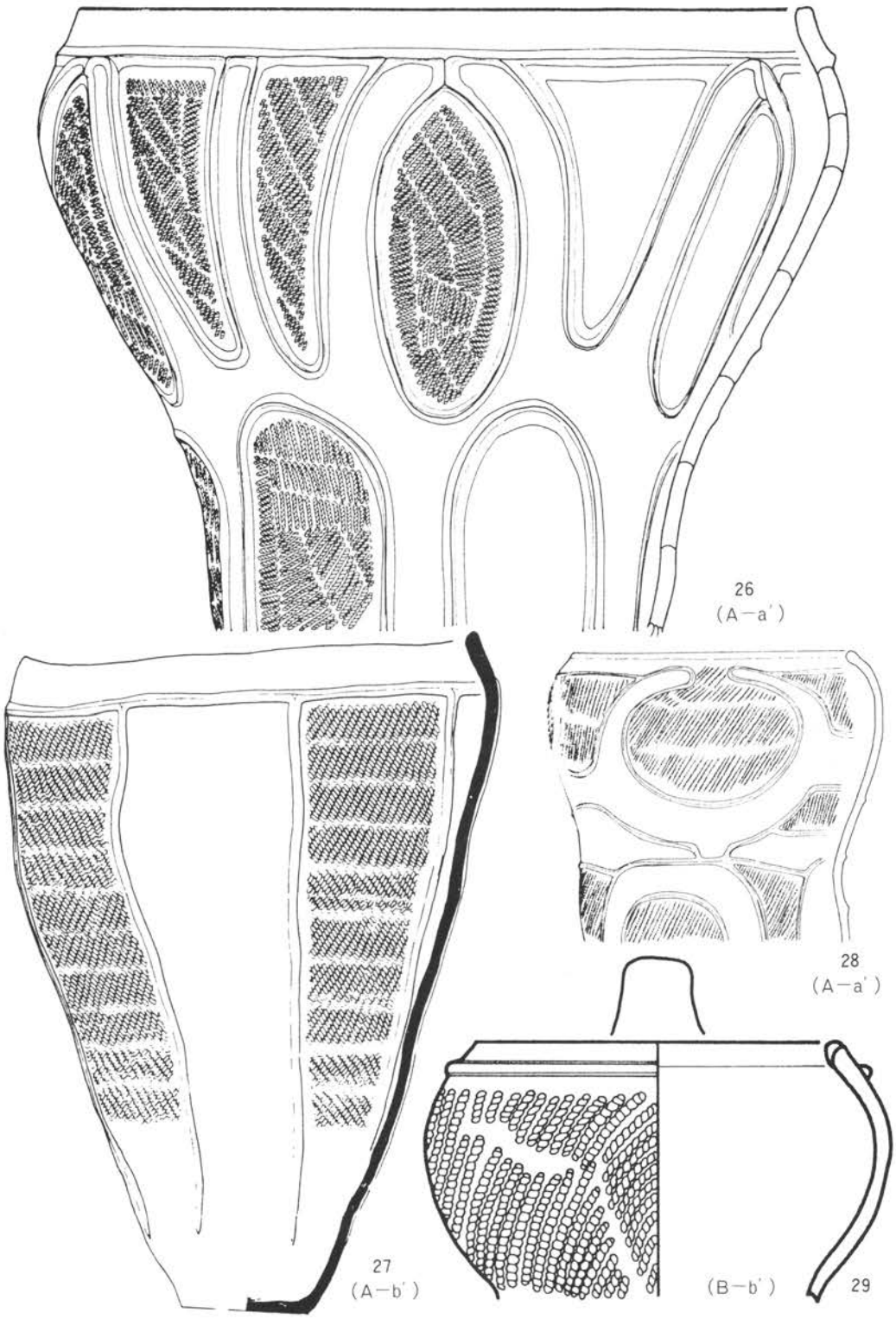
B類の中では特徴の識別が容易なB－ｂとｂ′について述べていくことにする。B－ｂからｂ′への変化は口縁部無文帯の区画が沈線から微隆起帯へと変化することによって特徴づけられる。この変化と対応して無文帯はより増大する。またｂ′においては橋状把手が付されることが一般化する。

さて両群の土器が時間的経過によって変化するものであるとするならば両群は互いに異った型式に属するものとして分離することは可能であろう。ここでは両群の土器を僧御堂Ⅰ式・Ⅱ式と仮称して記述していくことにする(10)。Ⅰ式として認定できうるものはA－ａ・ｂ・ｃ・ｄ・ｅ・ｇ・ｈ・ｉ・ｊ・ｋ・ｌ・ｍ・ｎとB－ａ・ｂ・ｃ・ｄおよび無文のCである。Ⅱ式として認定できうるものはA－ａ′・ｂ′・ｅ′・ｆ′・ｇ′・ｈ′・ｉ′・ｍ′・ｎ′・ｏ′とB－ａ′・ｂ′・ｄ′および無文のC′である。これらⅠ式とⅡ式を分離していく場合にメルクマールとなるのは次の諸点である。まずⅠ式では顕著ではなかった口縁部無文帯の存在がⅡ式では顕著となり、一般化する。この無文帯は多くの場合微隆起帯を使用して区画される。Ⅱ式では文様は多くの場合微隆起帯によって区画されるがA－ｅ′においては沈線で区画されることが一般的である。Ⅰ式では文様は隆帯と沈線とを使用して区画される。またⅠ式において口縁部文様や胴部文様に加えられたS字状・蕨手状の沈線文はⅡ式では認められなくなる。地文ではⅠ・Ⅱ式とも縄文が主体となるが、Ⅰ式のA－ｉ類型では地文に条線を用いた土器が少量存在するのに対しⅡ式では縄文のみが使用され条線文の使用は認められない。器種ではⅠ式において器台形土器の存在が顕著であり、Ⅱ式においてはA－ｏ′類型の壺形土器と橋状把手の付されたB－ｂ′・ｄ′類型の深鉢形、壺形土器の存在が顕著である。

次に両群のセット関係をみていくと両群の中でも出土例が多くセットの基本となる類型の土器はⅠ式ではA－ａ・ｅ・ｇ、B－ｂと器台形土器であり、Ⅱ式ではA－ａ′・ｅ′・ｇ′ B－ｂ′と



第5図　各遺跡のII式土器　（縮尺不統一）
僧御堂遺跡（19・21～24）　千代田（20）　船田遺跡（25）



第6図　各遺跡のII式土器　（縮尺不統一）
僧御堂遺跡（26・29）　後山遺跡（27）　千代田遺跡（28）

A－o′類形の壺形土器である。このなかでもA－a・a′、e・e′、g・g′、B－b・b′については前者から後者への変化はスムーズである。Ⅰ式の段階ではこの基本類型に器台形土器が加わり、Ⅱ式では器台形土器が消滅の方向へ向うとともにA－o′類型の壺形土器が新たに加えられることとなる。このような基本類型のあり方は関東地方各地におけるこの時期の土器のあり方をほぼ満足させるがこのほかの各類型をも考慮すれば各地において独自な様相を示すものと思われる(11)。この点については今後の研究をまちたいが、ここではⅡ式の基本類型であるA－a′とe′の地域的変差について述べていこう。A－a′類型はほぼ関東地方各地に普遍的に存在しているが栃木・茨城・千葉県の北半においては独自な様相を呈している。この種の土器は栃木県泉遺跡(12)茨城県おんだし遺跡(13)、千葉県千代田遺跡(14)から発見されている。いずれも口縁部が深く内傾する深鉢形土器の形をとる。文様区画は微隆起帯を使用して行われている。口縁部文様にはU字状と円状の文様が配置され胴部には逆U字状・渦文状の文様が配置される。A－a′の一般的な形態と異なるのは口縁部の内傾の度合いが強いことであり、口縁部の円文が膨大する点である。また胴部文様に千葉県千代田遺跡の土器の如く渦文状と思われる文様が付されることがあり、この点で、逆U字状の文様が盛行する一般的な形態とは異なっている。またA－e′類型についてみると栃木県古館遺跡(15)や群馬県小室遺跡(16)では文様が微隆起帯によって表現されるという特徴を有する。この類型の土器は神奈川・東京・埼玉・千葉の各県や、群馬県の三原田遺跡(17)においては文様は沈線で区画されることが一般的であり、上記の2遺跡における様相はかなり異ったものであるといわざるをえない。

以上のようにA－a′とe′の2類型は群馬・栃木・茨木県と千葉県の北部において独自な様相を示していることが確かめられた。このような分布状態は先行する型式である連孤文土器の主体的な分布限界とほぼ一致をみる。このことから縄文中期末の段階に連孤文から僧御堂Ⅰ・Ⅱ式の段階に至ってもなお北関東と東京湾沿岸の諸地域との間には地域差が存在していたことが知れるのである。しかしながらこのような分布の状態はあくまでもA－a′・とe′のみについて認められるものであってA－g′・A－o′、B－b′などの類型は以上の分布限界をのりこえてしまうという特性を有している。前代からの地域差を固執する類型とそれらをのりこえる類型の存在およびその意味づけについては今後の研究をまちたい。

Ⅳ おわりに

以上の如く本論では縄文時代中期末の土器の様相と細分とについて述べてきた。僧御堂Ⅰ式からⅡ式への変化は沈線や隆帯から微隆起帯へという方向性を有している。また器台形土器の終末とA－o′類型の普遍化という則面を有している。あるいはS字状沈線・蕨手状沈線の終末という面をも有しているのである。このようなⅠ式、Ⅱ式の時間的な位置についても考えてみる必要があろう。まずⅠ式に先行する土器にはいわゆる連孤文土器が存在すると考えられる。連

孤文土器は僧御堂Ⅰ式のA－d類型の系譜に属するものであると考えられる。いわゆる連孤文土器の一般的形態は地文に撚糸・条線を施文し、頸部にめぐらされた沈線の上下に連孤文をめぐらすという特徴を有している。僧御堂Ⅰ式のA－d類型では地文に縄文を施文し、頸部の沈線は存在せず、口縁部・胴部の文様は孤線というよりは波状の無文帯となっている。これらの諸特徴を比較した場合、両者は明らかに異っていると考えられ、分離することは可能であると考えられる。またこの連孤文土器の段階には連孤文状の文様を有する土器ばかりでなく、僧御堂Ⅰ式の各文様類の祖形が存在し、これらと連孤文土器とが組合さってセットを構成していたものと考えられる。この中でもA－a類型の祖形についてはその存在は確かである。またⅡ式の土器のうち、A－f′の類型はJ字状磨消縄文を有する称名寺式土器と、A－n′の土器は磨消縄文の同式土器の成立に影響を与えたものと考えられるのである。次にⅡ式と称名寺式との関係についても触れておかねばならぬであろう。両者の関係についてはⅡ式との共伴関係が確かめられる否かが称名寺式を独立の型式として認定するか、Ⅱ式の一類型として認定するかの解決の糸口になるであろう。すなわちⅡ式の基本類型であるA－a′・e′・g′・o′、B－b′との共伴関係の有無についての吟味が必要とされるであろう。

さて土器から見た文化の動態について見ていくと連孤文の段階から僧御堂Ⅰ・Ⅱ式の段階は東海および信濃の影響を受けた段階(18)から東北地方の影響を受ける段階への変換点であったと考えられるのである。すなわち僧御堂Ⅰ式の段階で東海および信濃の影響力を有した連孤文土器は衰退し、かわりにA－nおよびn′、A－o′などが東北地方の影響を与え始めてくると考えられるのである。このような外部からの影響とは別に関東地方のA－a′・e′・g′類型の一部は逆に関東地方から他地方へと影響を与えたと考えることができよう(19)。またこのような各地方の影響力は関東地方における在地の土器の系譜を断絶させるものではなく、在地の土器の系譜を保存させつつこれに加えられるという性格をおびている。このように地域を画しつつもこの境界をのりこえて他地域に進出していく土器の性格とその意味については今後問題にして行かねばならぬであろう。

最後に本稿で分析を行った土器類型のセットは縄文系の土器を主体とするものであり、沈線文系の土器を含みえなかった点をおことわりしておくとともに本稿執筆に際して御教示を受けた岩崎卓也・関根孝夫・能登健・笠野毅・松浦宥一郎の諸氏に感謝の意を述べたい。特に関根孝夫・能登健の両氏に対談中得ることが多かった。重ねて感謝の意をあらわしたい。

(1977・3・21日脱稿)

註

1　加曽利EⅠ式の前段階にⅠ型式を設定する考えが江森正義(江森1964)によって提唱されている。

2　この混乱は岡本勇(岡本1963)や杉山荘平(杉山1965)によって引き起こされたものである。

これとは別に吉田格(吉田1956)や坂詰秀一(坂詰1965)による型式の提唱がある。

3　このような容器の在り方については弥生・土師器について一般的に考えられている。

4　鈴木公雄氏によるセットの提唱は文様と器種とからなるセット関係の把握について行われ、しかも後・晩期にのみ対応できる方法であった。この方法は遺構を単位としない点で一つの特徴がある。(鈴木1964)

5　このことについては麻生優氏によって述べられている。(麻生1975)もちろん一軒ごとのセットは将来においてそれなりの意味を有するとは思われる。しかしながら一軒ごとのセットの意味を解釈するためにはまず全体のセットを把握する必要がある。全体のセットの様相が明らかになった時点で、個別の住居址のセットの相相を把握すべきであろう。

6　いわゆる加曽利E式終末期の土器に付される断面三角の貼り付けに対する名称には微隆起線・微隆起帯などが使用されている。本論では草創期の土器との混乱をさけるため微隆起帯の名称を使用した。

7　城近憲市『宮地』狭山市教育委員会1972年宮地遺跡出土のこの類の土器は橋状把手が1ヶ所付された壺形土器である。文様は胴部上半から下半にかけて施文される。

8　『考古資料集成2』神奈川県立博物館1970年の図版8の1。

9　吉田格氏によってEⅢ式のメルクマールとされた土器である。これに関する最近の論文には能登健「縄文文化解明における地域研究のあり方」(能登1975)がある。

10　本来両群の土器は加曽利E式土器の範ちゅうに組みこまれるべきものであるが、現在加曽利E式土器の細分はEⅠ式の前段階に新型式を設定したり、EⅠ～EⅣ式の具体的内容についての吟味も完全になしえたとはいいがたい。ここでは両群の土器をこの分析の出発点となった中野僧御堂遺跡の名称を使用して僧御堂Ⅰ・Ⅱ式と仮称することにしたい。もちろん将来においてはこれら両群は加曽利E式として細分の中に組みこまれていくべきものである。

11　東京都西部から神奈川県三浦半島にかけての地域においてはこの時期に刺突文を全面に施文したり渦文状の文様が多用される土器が存在する。このような土器は甲信越地方の影響下に成立したとみられ独自な分布範囲を示すものと思われる。

12　海老原郁雄　「泉遺跡」　栃木県史資料編考古1。1976年

13　『茨城県おんだし遺跡』大洗町教育委員会　1975年　同遺跡第1号住居址覆土第2層出土土器。

14　『千代田遺跡』千代田遺跡調査団　1972年　第39図4のⅣ区出土土器。

15　渡辺龍瑞　「古館遺跡」　栃木県史資料編考古1　1976年。

16　尾崎喜左雄　『小室遺跡』　勢多群北橘村教育委員会　1968年　この土器は微隆起帯を使用しているが地文は無い。鋭利な頭部を有する逆U字状の文様が配置されるのみであって本来は別類型とすべきであるが、一応ここでは本類型に含めておいた。

17　『三原田遺跡』群馬県企業局　6－27の石蓋埋設土器であり、文様は沈線で区画される。

18　能登健　「縄文文化解明における地域研究のあり方」　信濃27－4　1975年。

19　このような土器は静岡県入谷平遺跡などで見ることができる。同遺跡の土器は明らかにII式A－e′に属する土器である。

引用参考文献

青木義脩　1976　『東北自動車道浦和市内発掘調査報告書』　浦和市遺跡調査会。

麻生　優　1975　「原位置論の現代的意義」　物質文化24。

安孫子昭二ほか　1974　『貫井南』。

井上義安ほか　1975　『茨城県おんだし遺跡』　大洗町教育委員会。

井上　肇　1976　『黒谷田端前遺跡』　岩槻市遺跡調査会。

岩井住男・佐原和文・嶋崎弘之・藪原和男　1970　『膳棚』

海老原郁雄・渡辺龍瑞　1976　『栃木県史資料編考古１』

江森正義　1964　「千葉県市川市唱行寺貝塚の土器について」　下総考古学１。

大場磐雄ほか　1965　「武蔵野市御殿山遺跡調査報告」　武蔵野市史資料篇。

岡本　勇　1963　「横須賀市吉井城山第１貝塚の土器」　横須賀市博物館研究報告７号。

尾崎喜左雄　1968　『小室遺跡』。

神奈川県立博物館　1970　「雑色遺跡」　考古資料集成２。

栗原文蔵ほか　1962　「大蔵遺跡」　『新修世田谷区史』　付編。

栗原文蔵・今泉泰之　1973　『岩の上・雉子山』。

群馬県企業局　1976　『三原田遺跡』

坂詰秀一　1965　『新座』。

甲元真之ほか　1971　『仲町遺跡』。

城近憲市　1970　『船田Ⅰ』。

城近憲市　1972　『宮地』

杉山荘平　1965　「茨城県新治群出島村岩坪貝塚調査概報」　史観72冊。

鈴木公雄　1964　「土器型式認定方法としてのセットの意義」　考古学手帖21。

関根孝夫ほか　1973　『貝之花』。

高崎市教育委員会　1974　『八幡原遺跡』。

高山　純ほか　1970　『川崎市宮崎字大野遺跡発掘調査報告』。

谷井　彪　1970　『内畑遺跡』。

谷井　彪・並木　隆　1973　『坂東山』。

千葉市史編纂委員会　1976　「すすき山遺跡」　『千葉市史資料編Ⅰ』。

千代田遺跡調査団　1972　『千代田遺跡』。

土井義夫・新藤康夫　1971　「縄文中期末葉の土器二例」　考古学ノートⅠ。
戸沢充則ほか　1976　『加曽利南貝塚』。
沼沢　豊　1974　『松戸市金楠台遺跡』。
能登　健　1975　「縄文文化解明における地域研究のあり方」　信濃27－4。
平尾遺跡調査会　1971　『平尾遺跡調査報告』。
堀越正行　1972　a「加曽利EⅢ式土器研究史」　（1）　信濃24－2　1972　b同（2）　信濃24－3
1972　c同（3）　信濃24－4。
安岡路洋ほか　1974『後山遺跡』。
八幡一郎編　1971　『高根木戸』。
横尾義明　1974　『飯重』。
吉田　格　1956　「東京都恋ヶ窪遺跡」　銅鐸12号。
渡辺　誠　1966　「日本原始考古学会の動向」　歴史教育14－3。

このほか本稿に使用した資料としては千葉県中野僧御堂遺跡の出土品と同県東金市東台遺跡の出土品がある。中野僧御堂遺跡は1975年に千葉県文化財センターによって調査され現在整理中である。（近刊）